朝夷巡島記第八編一

イ13
939
136

13
939
1

朝夷巡島記

松亭金水著
葛飾為齋画

第八編五卷

文金堂
文榮堂

浪華

朝夷巡島記全傳第八編叙

和漢新奇之譚。從古昔至于今。所著若干卷。雖然。往作稀焉。這朝夷巡島記者。曲亭翁戲墨雜興。燈下之眠未覺。頻談無根之夢。嗟夢哉夢哉。盧生一夢五十年。足示人生一期矣。南帝一夢南木者。以足清天下矣。貴賤尊卑貧富及。

哀歡苦樂俱夢也覺而一堆之土饅頭孰不逭於終煙乎生前富貴食前方丈身纏綾羅錦繡却罹隨獄苦趣焉生前貧賤食藜藿身纏褸褐絺絡却生昇平樂國矣無他善與不善而已矣是以小說者流克考其夢之味諭勸懲之意者以謂佳作可也今及綴於此編雖頗基其意啻是不免紙古人之糟粕之譏云爾

皆安政四歲次丁巳仲冬發行

松亭迂叟題并書

朝夷巡島記第八編全五冊巻中總摽目

巻壹　續集第十一　英雄議を鎌倉ふ帰ふ
　　義邦石戸ふ孩児を設く

巻壹　同　第十二　同氣相求む奸計の密話
　　理を説狩を止む婦人の實

巻貳　續集第十三　一頭の野猪確執を釀し
　　二歳の小狗隱川ふ漂ふ

巻貳　同　第十四　幻術を現せ山神の祠
　　危難を救ふ夢菴法師

巻貳　續集第十五　草菴の奇遇源家の族
　　道人無為の教へを説く

巻參　同　第十六　邯鄲ふ草菴の夢語
　　石戸の旅寓家族の歎

巻參　續集第十七　主を索ね托ぶ隱川の上
　　奸計一さび就る石戸の郷士

巻四　同　第十八　黄金ふ溺る優婆塞が浅智
　　急ふ迫ふ佳人の嬾ひ

巻四　續集第十九　身を捐て節を立てん佳人の情
　　残毒忽地報う家族が最期

巻五　同　第二十　初て非を悟る懺悔物語
　　奸計再三到る程谷の驛

通計二十條總摽目畢

猿面大王
吉見冠者義邦
虎賁將軍

妖魔幻術
雖精奚若
勝善者
熊威魔王
狐妖神通

加之如
蟲の蒼ル
○朝夷三郎
義秀

熊信於
南海
之
民
廟食而世
而不絶
使其必
一日安於朝
廷之上
右假賛辭退之之文
而充義秀
○葛西清重
月耕

古今集
今さらに
あふいはしらぬ
世のなかの
せとぶ
○義邦の嫡男 翠麿
○三草太郎五昌之
○吉見冠者義邦の室 笹媛

かくとも
みよ
おもふこと
なかうを
ものは
まもれば
神の名誉
あらまほ
桂園一枝
景樹
○宮小四郎弘義が渾家 斧木

附言

○毎編姓氏畧目ヲ掲ク。今この編ハ新出の者。宮小四郎弘義仝董次秋弘と弘義ガ渾家斧木。修験修道院酔殘の他ハ。みな前編ハ出るゆえ。別ハ畧目を掲げ出さず

○此編ハ。朝夷義秀。判五等ガ讎を討ち。巴の尾ハ再會あるを。趣向ヲ。義邦の本傳多端なるをもて。いまゞ其場ハ至て竭さず。既ハ楮數限アるゆえバ。開ハまた後の篇ハ讓ル

○この編總て吉見冠者義邦の傳繁くして。義秀ガ事蹟稍寡なけれバ。看官遺憾多かるべし。第九編ハ至ては。專ら朝夷の傳を挙ぐ。前後の猥雜作者の苦心宜しく察し給へ

金水再識

東都　松亭金水編次

續輯第十一

英雄議をそ鎌倉ハ帰ル　義邦石戸ハ孩児を殺ク

案了前齣再説獣六郎ハ義秀ハ。うち對ひ。主僕不慮なる危難ハあれを妥恭ハ。と。嘗顔を拜ゆるこの嬉しさよとひて懷抱探り。岩神なる剌五ガ状を。把出して。ハ。ハ。依這面命ハ任せ。義邦ハ。と。彼処なる古紙ハこの年来人住ざる部ハ壊れ檐傾ちて。見ゆ入るを容るゝ。ず閑室を郷ハ住居ます。宮小四郎ハ家居も廣く。彼の修理を加るゆえ。まづ堂ハ居のうちを。ハ。ハ。て義邦ハ夫婦主従を処ハ入り。日ゆゑず番匠を促して。まづその作ゆゑ始めるる。然るハその果ると伏て安閑と居るゆゑ。ねが夫ハ

越の岩神へ赴くと暇をもとめ吉見ぬの宜しき江三二廣光も。こまやかに表遣遣はるべし。今二三日逗留して。倶に彼処へ赴くべし。その帰らん比及ひ修理も全く成就すべし。とあるよりて逗留するに。その明の日筐媛の産の気つき苦悩を廣光指ゆ。摽吉及びもと下僕も彼是と物もまどろこの雄士ゆえ。かゝる時の物の要ふ立ちたいと多り。こゝに彼宮姓が渾家の斧木とらんとるに年も四十と三ツ四ツ若て。未あり乳ある女子あり。その初めより媛と労り。伝実ふ至ふ歌侍ふ。媛もまた心と措き者のことと語らひて。彼ら意ふ任せり。然れども産の乳のつれなきと斉一侍と去らず。久抱のんと思ひそのの甲斐ふその夜安産して孫の男児と産めり。こゝふ於て冠者ハのゝ。この一月ふ称ひ勇ましきこれと喜くのゝ。彼斧木い老実ふのもまど昨今あたいまど別業の深きふなります。かゝる時こそ廣光の渾家。浅良井のあゝんあんと冠者も嘆きのふゝ。その

嘆いふも道理なり。一日も迷きふ差こまあゝしと。七夜の儀も又果さして廣光共彼処と起ゆ。急ぎ岩神ふ参り。著きこの月来の恩と謝し。如此さのよと告て浅良井母子と別れ飯らんとす。判五郎も尼も涙もこゝと少ゝ。歓び。蒲殿の尼子孫いさ吉見の刀称ぞ。ひと女ゝ。近田兄弟の生まれ。彼家再び栄え。芳代の僧なり。筐媛のもん称び。然ることと併て産らるゝと。然いあれとも産ふ係こと。隔ゆ分副の女子なくて物毎ふ不自由ふこと在りけり。さるべき急ぎて浅良井ふも。起ゆいさるべしと。甲斐と共に世話ぬ。これ已い判五郎に出し。後念あて。如此ことの功績あり。眤近の列ふ擇えれるひ。義人光仲ぬの尼牙の上のこまて。綷細やうふ絡ひ。うの人と少て或ひい称ひ。式ゝ嗟嘆せゝ。然ふ而返翰と傷りけるとの然いとて廣光浅良井父と。倶ふ出て語と急ぎ。三國街道五て袂と別ち。下僕ハ武蔵国を志して来りふ荒川の

邉艮渕ハ宿り需めゝその霄ハ。箇様ゝのとあゝて敗ハをとる剉差の極ハ
めハ謂ゝる。夫より後の一件ハ尚ハ云ゝぬくゝとひて判五う返翰を出せば。
朝夷いまハうあけてその表書と熟祝いゝく愁る糸勢ハ。獸六弟ハんを
得ゝて主の敬とうち成る。當下義秀首を擡げ。れを積差ハ餘慶あり種ハ
差ハ餘殃ありゝゝ上古聖の金言ハて。誰ともうく知ゝるゝ。吾あハ伝ハかゝれ
ゝなり。抑判五ハ温順ハて仮初ハも惡を做さゞ人の為ハ我を捨て一点ぞうも
惜ゝ世ゝ佛ハ作若と我く勢めて先祖を祀り親族と品ハ。その家頗言帝と
ゝとも。此と謙ゝて稿れるゝゝる。忠直の性なゝ。近未落命うち続。絶ハ
一家の絶ハ至るもれハ世の業因を凡智と仏て量ゝるゝとひさてうも嘆く。
獸六いまゝその云ゝを伝ゝを膝を進めて伝故ハ若力称さゝう嘆ゝをハ稲向一家
无異ハて来ん春ハ媛と伴ゝるひ。物ゝゝ後会へゝち越んと宣ハり。伝糸ゝること

のゝべゝと。誘る面を熟祝て。然ゝゝハ理るり。我後会を發足て陸奥へ向ハ
途中。箇様ゝゝハて一三箇ゞ。今盤ハ逢て一件を生ゝり。その釈ハ如此ゝと矢聖
堂ゝゝの繹の顛末。具ハ語りて开ハ伝達ゞ。岩井を起汐せ。その夜のゝゝを
あゝりとぞ因て我今ゝの訴ハり。出羽ハ出然中ハ。ハんとするハ岩井へゝき。箇宜によ
らゝ當の敬磨五平ゝゝんと退治ゝゝ。まゝうゝ毋と憑ゝうる巴の尼ゞ安ハ武
汎ん。伝ゝの酸ハの掛まゝゝと心て獸六大ハ後ゝゝハて返らぬゝゝあれゝ。その滅
今一夜早く来らゝ。江廣光あり不肖ゝゝ。下僕ゝかの家ハまゝ膝ゝと田在
媛ハゝび判五ハ禍ハゝせ。悔ゝゝまゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝ落ゝ涙ハ眼ゝゝゝゝ。
更ハ右左の刑ゝゝ。侠間ゝゝ猛八ハ膝と逃ゝ腰越姓ゝ。話説ハ字ゝ越の
岩井。判五ゝゝ大人ゞ泰山。ゝゝ田雇媛ゝハかの女児ハ産せ大人ゞ子ゝゝ。
然ゝと賊ハ過ゝゝゝ心中ゝゝゝと推量れ。在下不肖なゝとゝゝ。大人に

隨順のを初めに彼処に弦を山祇の麓五平と云らんと掌の中にあり。大人が這両の危難にあるを一朝のことにのぐ。在下熟思維するに北条力称大人が大功屢あると忌と嫉と猜に假託大人と斃心を快うせんとする計策に

あゝんとかの旅人が持りとの人隠語の状をとを示ぬ別その状髣髴にあり

とて。伴の肱とさし出に人に満に火炮して云ふ云云。朝夷熟考て

這は和殿の考に差にて。時直に内を出て云云喪ちんと計をしのこ

然いに在下北條に曾て仇あるく怨ともるれに。ひるまで初まで心を絹

てうまと計るにやく云海がてとべ猛八小膝を礫として大人に聰明

人に新え。胸中の明らうると曇らぬ境に等しとの。物陰りをたにあ

まべ。遠つて眼の及ぶぬとあり。古人も脱に睫上の塵をとんぎとに云遺り。在

下等に遠所に在て。更に官遣に拘ぎらるど称て事情と察するに精

思ふに北條刀称父子の奸謀とまさ一朝のことにあらず。故に智量衆人に

超え後と已が隠謀の妨とるべく人老べ暗に黙くるの心あり。脱に多田の

藏人に。陸奥に大功あるに。奸計とて陷と罪るかんと做しけるとど其

罪信偽と決せるば嘲諸に大人が明智。忽地水源とんぐさまを解

るく奸謀ちとの泡とるるとるり。一斜故幕府の内より。蕃助の

老たと喪ちんとする萠に迷ひあるく大家に。一族慶く所従多し。

因て斃ぬに容易くず。故に枝葉と茂るそもく。舊功の老臣とい

所謂三浦和田畠山安達土屋と称し。その員いまうまで今かの家に

泥ふのあり。然るにその世移り更りて表は害に為るべ敬とこれと

心とせば。かの土肥先次郎が輩と大人に則和田の三男廷尉とい大人とい

ば為に敬業るまべ。依こと物に假託てまづ枝葉に和さんとす多と

素ふ甘ぜしそさぞその心の廉直のこと表ふ見え縡を為さバ始終その奸計ふ変
らざるを稀なるべしと吃て朝夷ハち蹤て和殿が詳論究めて妙なる哉さふ
這回かの奸計ふ当りて既ふ云云なり。尚ふ目の吃えし如く本街の差出の
守護目代等も好識のことを吃解めて吾を措めて挿ふせんとて競ふより
勲をも立てると争ひ罪を倍のこと益るけれバ白沢殿を出羽ふ入り。先それ
より賊ふ与し山岩針を玩ふれども遂ふ遜会の動静も知るべく。尓見て彼地へ
帰らんとしと宅ふようての所へ馬の鼻を向るが。まさしく逸人等五百ふ先達
遜会人囲さまことを悪さる事ふ訴へつ。その罪を解く術なけれバ今ふ及ぶ
なるべしなどいふ時ハその理ありてとの心より寛ふ墜んとの評論と見へて和
殿が明辯吃きれりと問ひゐまて猛八ハ左右を顧ておひ出る長智殺
の心を忘まそかく言すハ鳥滸なれど畢竟大人が心を思ふの赤心よりして

らん所倘の怂恿なぞバ。舎すべきもののことあり。因て只管随ふべしといへんと扇を
殇ふ膝うち鳴し。今大人が宣ふ如く。この下より岩針へ赴きて自然目を延
さば必ず其という。在下が思ふへども。まうち速ふ遜会を取り。才一這回の急
務と云ハかの接断の一事也とい。力を労さずして。一朝ふ民と畋服し。物地静謐と
なすの條を言上してさて碧城の愛妾毎石より入るが如く嵯峨のことふよって諍論と
なり。時直及び阿武隈等この心を詐するふよって竟ふ刄傷ふ及へるなり。去れ
ども毎石が所業命の因縁なるを知らず。深き故ありと気づけども時遅すされ
阿武隈ますまし二個ハ生てとらひしかど彼ハ多勢ことさらハ一個を一ト等を厭ハ
なく二個とも斬害しぬまバ。糺明らもするよしを失ふこ々ふ於て茲ふ増の輩
両個を搦め得て将て来ぬまでその容るを知るや否や。さて堂下のて洞狂ふ
因て発接せしふあらざるゝハ渠等もよく知る所なり。と在ふまうふ云上

白澤越ふ
猛八得失を
説く

あゝバ。執権こゝを何とか計らへ。倘雑類といひみて。[illegible]と林示潤をごす
ゝ。彼隠岐の狀とゝ。元明とゝ。黄元善信二個のうち人紛へ。
事故なく済めべ。今遅ゝあさバ急りと言解ゝ不るゝらん巴の尼ハ再ゝ
ゝ。亦その賊主魔五平と撃んとゝその後ゝ。但不日ゝ賊と対べ。
其情と晴さゝ欲ゝ在下考よゝ彼処ゝ之就ゝ大人ゝ代りて賊と対べ。
大人ゝ之より一向ゝ様変ゝ飯りゝ。理非明白ゝ述けまゝ義秀熟ゝ思ゝ足
下の公論究めて理あり。然ゝ[illegible]ゝ長ゝ[illegible]ゝ様変ゝ帰らんゝ。絨魔五平と撃
とハ私の儀ゝて遅くゝも妨ゝ。足下も倶ゝ様変ゝ[illegible]父及び兄弟ゝ。對面と
做ゝ。衆議決ゝその夜と明ゝ。さて彼魔城の郷民等ゝ志いさゝ[illegible]。
様変ゝ帰ゝ[illegible]ゝ。かく之人数と伴ゝ。その実ゝ宜ゝ異心ゝ[illegible]
疑ゝ[illegible]ゝ。さハ是各ゝ好去ゝ。肝ゝ銘じて忘ゝ。他日志を[illegible]

ゝハ夫ゝ[illegible]の親いとゝ[illegible]ゝ。但你们ゝ此地ゝ来る途中ゝ。
奪掠友と訪ゝ城戸四郎三章太郎五両個の従者とひき須て武義のゝ[illegible]
ゝ彼処ゝ障ゝ[illegible]ゝ。[illegible]ゝ刻り著ゝ。[illegible]ゝ我ゝ任
と知ゝ[illegible]ゝて進退と決ゝ。倘かの両人駕城ゝ来り。如此ゝ[illegible]
行方と索ゝ[illegible]ゝ。[illegible]ゝ様変ゝ[illegible]ゝ。急ぎ両個も飯ゝ。演説ゝ
と憑ゝ[illegible]ゝ。農民们ハ一容ゝ。その[illegible]ゝ畏ゝ[illegible]。但此処ゝ[illegible]ゝ副[illegible]
ゝ快ゝ様変ゝ。様変ゝ[illegible]ゝ京所ゝ[illegible]ゝ送り奉ん
と一容ゝ[illegible]ゝ推註め志いゝ[illegible]ゝ如ゝ之人数と引俱ゝ
帰らんゝ。[illegible]ゝ[illegible]ゝ。その[illegible]ゝ固ゝ辞ゝ[illegible]ゝ従
者のうち。両個ハ脱ゝ路ゝ別ゝ。その[illegible]ゝ甲斐ゝ[illegible]ゝ雑人のゝ[illegible]ゝ
生捕と保護ゝ[illegible]ゝ。你達ゝ[illegible]ゝ思ゝ。五七個ゝ[illegible]ゝ生捕と。

労〻ろ扶け藻金へ送り就さべん慶ゑ〻こんと此で人と点張で君がれゑるに
とゑ〻。法て多人救送りのせ。とのゑ賀べ生捕ハ吾们定ゑ弱りこうれ心易く
思せこて。於て彼生捕と山公便ゑうち無せろ。就合十二三個こまゑ副ー張金へと
遣り生ま七畠下ゑ朝夷ハ馬とさ人農民们ゑ返ー異へて別まこ生ゑの所と
さち生で張金へ赴きろ。案下某生再説とゑ彼吉見冠者義邦へ食色ゑ
武蔵國石戸の荘へ入邦ゑゑ。石戸在藤ーの古鉞ハ年来人の任ぬ故に恭
格ゑも頑き個ま。檐ゑハ苅葺ゑひ義りて人任居べき容ゑあ〻ず。藤ーそ
ゑ張金ろ。如此とこの上彼処へ御教書の下りゑ所の荘宅村長ぐ〻ゑ
評議七鉞の修理と加ろゑどハ郷上ろ。宮小四郎弘義ゑ方と主とゑすど。と
宮ゑ〻ろこゑゑ義邦と妻内して。まづ彼茅へ拒張まて打ーも主人小四郎ま。
要のことありて近郷へ出ゑ由ゑて家ゑあ〻ず。その渾家斧木嫡男董次秋弘

ゑ〻の出尚へ君美と謁七答應ゑ。先年安達景盛ゑ。この地七没収せ
ゑ〻ろ。地頭ろ〻のゑ〻ざまべ農民们我ゑゑ募り。我们ゑ下知ゑ背ゑ
父のゑとく迷惑せゑ這回君の下内ゑろ人心大ゑ定まゑ〻。在下名ゑ於ても
満足せ。父弘義も潼ゑ君ゑ入邦と為べきゑまと縁金ゑる郷村ゑ。疾病ゑ
ーとのゑ〻せゑろ上と得ゑ張金へ。ち就て病人のいゑゑりぬらん。
今ゑ於て沙汰もあ〻ず。然ハ是近き内帰郷して拝謁も怠ゑべけまべ。後と
休息あり。且ハ鉞の修理のこと。物の要ゑハ七ちゑひと在下君の命と受て父
ゑ換り右も左も。汁ら比ゑうんと恭ゑく半退従の剣と斬へて慰勤ゑ遂けれ
ば。義邦も志の厚きと感ー笑ゑ。元来土地の安ゑ内ハゑ〻ず。万のとこゑ和熟
ゑ〻ず。汁ら比ゑ住居のこと就て酒杯と挙て弘ゑゑ。小四郎ゑ渾家の斧木ハこの
年四十おまり二ツ四ツゑろゑ心の底ハいさ知ぎ。いと老実ゑる容ゑ美媛と

ちく痛りつゝ身をならずまでハ懐姙にや程なる死ハ祟勢。冷なるハ毒となん。
媛ハ毒の死ハ産せしからなど言ひきかの不作まても常言ハまれ不案なる産の安危
うのあるしやせ吾儕も若きその折に三人の児を産たるが。こゝろ安くして障も稀
ならぬハあらざりし。是ハ又吾祥なれバ今年も産の気つきたれバ。郡てのみぞ吾
倚り任し少しも心おきなかりしに。老実ならひしまでハ姪媛ハそ笑みて不測の縁
しふこの家へ来り。住居と修理せる中にも心を延かけ待けるに。況てや今こそ
あわまハ言ふまでもなく今ハまた産の気づかひ何かはせん。数代の家隷江三二が。
渾家浅良井といへるハ是等のことよく心得て信実なる者にあるなれば今ハ
故ありて城の玉岩林といふ所にあり。吾们ら此に落居るが。郡に三二が寓居
ここに迎へんなれども。昨日今日そまでも逢はず。初産のまねて何せん術
も既に労みたず。縲余より我れて来しうのハこゝの雄士なりそまでものことぞ知らぬ者

のこに侍ればこそ安堵もしたりけるにおん胞が動きそむれバ痛みの些も得ぞならぬ嬉
さハ。俞へ入らせまゐらせ身ごもりてもこゝに居らせまゐらせんなどおん胞が女児と見えたるよし。此日とは
まゐらせバ。斧木にはからずも良い作まで吾儕の及ばんかたる時ならん由縁なれど。いかならん人
どもも世にある程の人情ハ棄がたしと。況て良人なる小四郎ハ今こそ民には陥りて
郷士とよばるれど素性正しき者にあれバ。他に容さるまじき祖父ハ賀茂殿の末にして
者義公が二男を侍ると。然れバ吉見の冠者殿とよび。従来門根運落て
殿のおんハ吾たる他とに異なる條あれども。蒲冠者次郎義継ぬ。弟義光ぬ。ゆゑあらば
て冤の罪を受て甲賀山にてその氏族ほぼ討死して。あはれにもその跡のみなりし
彼一族ほとんど千隔労漢子とあって侍とせられし跡に門絶えり。鮒田晶を耕して
既に三代を送りぬ。されバ小四郎ハ運拙くて余殿ハ目今の総追捕使
とありて威勢宇宙に冠らしむ。その氏族として郷の下さ寒郷に潜み居るぞ。

常に慚悔なしけれど。まさぬ何しも詮方なく困て紛らす。董次秋弘その性急
なりければ。その素性をもて人並に倣さんと思へど。牧心吾儕もともに念ずるのみ
他の子は徒に過しをいひて笑ひ逢へば。その不同緒瘠(?)のことなく更に
用なかる縁もある吾们。いつで躰思なすべき心と為く何にかはま果さず
分付する人もなく。一と懇ある會釈に従来忠朴の處女なるをもて其志を感じけるが
なれ老に召ひける。右左して両三月過る宵のことなりしが暴に腹の痛むを覚
媛は横ひき被ぎ悩める容に冢老と怖れて二獣六標吉等より産の気の
萌しやと喋ぐをも。斧木は来り。媛が腹をと索りつ。逆に催しに疑ひ
す媛のもとへ来まゐらせしより。夫と推えて隠妾を縁て侍しとあれる者に彼を
呼んと小奴に分付走らするまでも程もなく老媼来りて腰を抱き章(?)つの辺まで。
小腹へ摩り下るに媛は頻りに悶へしが。その夜二更なる頃妾を産落さんとする

ば男児にて産声も。いと高らかに揚るまで。斧木はまた懐きとりて。よき若者にて
侍るかり。刀禰にも然こそとかつ著ると冢老はとりで心中の歓び大かたならねばさう
けり。媛をば備し蓐床に居ゑ唯備ありける血の兼且湯漬など進むるに弥悦
骭(?)のなくて心さへみぞ清々しうなりて。人々も大かた安堵のおもひをなす。まいて三
日こそあれど。斧木は且夕所も去らず。いと信実にかいなでるものから。また洲濱の
落けまじきやうにつけて何くれと心をのみ尽しければ。江の三三もとより等
逆も近ひに来る所なれば一日も早く紙(?)に赴き浅良井を将て来らんとて冢
着にもこのよし吹えおきて。獣六郎と諸共に急ぎてうちでたる路すがら冢老と
標吉のみその跡は甲斐なき雑人にて物の要にもならず。斧木が狡まで候
実あるにこの家の婢女等も且暮に心を用ひ孩児のことも媛が助ひさへも
まで吉見の冢者も心は易く。おのれに善てまことに大かたなる人の数とは初て

児と産せ給ふと十六人の孩ふいひ遺て実ふこと不起に歎ひあるめや然れども
熟と考ふに此の人と云ひ聞せば荀くも遠祖八清和帝の皇胤ふて世と武ふの職
ふ居り海内ふ威と輝せり栄枯得喪の慣ひあて一且平氏の世ふ衆ふ滅ふ消
残る五更の燈火あるるふ潜と忍ひ至りて源家の栄ふ徳会廃ふ
古来ふ為ふ徳追補使の職さ人ふ賜ひて併ふ雄功でや吾
父ふ為ふ犯頼朝ふと義経判ふ功績ふ為ふ逸老の舌ふ義経ふ
ふ頓滅ひ続きて父ふ寛と仏ふ仏豆の玉修禅寺ふて終ふ生害ふ
吾当時ふ稚ふて物の善悪ふ辨ふ忠義ふ身家ふ為ふ冊ふ
人ふ為ふ昔況と為ふ傷と断ふ
ふ一ふの主ふ為ふ終ふ家ふ為ふ興さんと云ふの外ふ念ふ
激運ふて志と仏ふ遂ひ寒郷の主ふ為て生涯と送ふ後代ふの

恥ふ為て為ふ世と捨人ふ教ふ今ふ勝ふ
と為ふ今憐ふ孩児と産ふ
ふ為ふ世ふ為ふ家子ふ
墓目胞刀の式七夜ふ門ふ更ふ祇候の面と車馬門ふ市ふ為て夫
の進物ふ堆高ふ積累ふ今寒郷の士ふ為て誰ふ人ふ為ふ一個両個の浪者ふ城洛
ふ淋ふ寓居ふ児の字と踏ふ七夜の儀ふ果敢ふ
ふ彼と思ふ会稽と限ふ

續輯第十二

同気相索む新汁の密話
理と説狩と止む婦人の實

斯て麦ふ家の主宮小四郎弘義ふ我ふ此家ふ在ふ為ふ仏細と案ふ

治に主ぬる年安達景盛が地を没収せられしとき。和田次郎義綱の後胤さ
故ありてその荘園を賜りしかど年来北條家へ出入して湯治始めに時政父子の。
家の臣にも親しけれども彼に媚ず賄賂を贈ことせざりければ北條の心にも。
任せぬことに折ふしあるべからずその後沙汰ありてまた義はなしとて何とも忘れず
作ふことあらず年甫暑寒へて更なり鎌倉に住みて屈におもねれども家の董次
秋になりて十八になりぬ時の今とぞ件の荘園を吹挙して賜はれとて帰りその望
年董次は十九になりぬ所々の馬さへに違ひくて遠祖よりの由緒とて石戸の荘を元
のごとく脱に再び二再四に及べども時政今は不便に思ひて一時廣元善信等に申しつけ
評議しけれども義盛義澄はその罪にあらずといへども故判官為義公の怨
敵となりし筋ありおもしろその枝葉なりける功績のあるべき荘園を宛
ましなる近曾依怙の沙汰に似たれども上より疑はれんとてこれも不理あればとて。

時政も強てはいはず。その儀に止まりぬ。然るに逗田吉見の冠者に賜りしかばそれを
受て五年の望を失ひ将命下びて下はしらへ是を返しにしならぬまでこの年来
折にふれて鎌倉に往かひて北條殿の君臣に親しく睦まじかば分限に過ぎたる芭苴を
贈りつゝ是ぞの故ぞ五十ともなれ董次として世にありしとありし事のごとく
あるとぞ縁て望める石戸の荘今義郎に賜ひて以来永劫情願の成就すべき由も
あらず。只今給ふ所為の如きと思ひそ措べきものにあらんに気儘に至る誠ても北
條殿に歎かんとて両三個の従者を将て鎌倉に赴きしが。雪の下に旅宿して。北條
家に祗候すると亭を以て執権へ面謁を請けれども時政は決て応ぜず。石戸は
荘を義郎に賜ひしを怨むるにて来れるものなりとこそおもふなれ斯て只家中の
族ども大かたに款ひぬと心の底に叙びて一日閑暇の時を期て其よう宮小四郎が。
旅寓にひ訪る。小四郎弘義は款びて取るものもとりあへず敢て急ぎて鎌入参りけ

さらば執次の者立出てまづ案内する廣間に誘ひ且くこゝに控へられよと執次の雄士も出て執権ども見へ罷り出て對面をなすべけれど此ほど労にて不快にて起居ときも心に任せざれバと光弼にハあらざれど平生に居る一室にて面會せまく存ずとの議海如心もかん大慶なりと手をさげ小四郎ハとまれ心中おふらく歓び吾々これらを思へバとて心隔てずまことに居る一室まで逢んとあるハ原心にてもあるは僥倖なり数田額著て老体ら所労をも稍て召させ給ふことハ恥にさへて辱く何方までも出まからん頓て案内を請ひつゝその叮嚀なる法に随て頓りに斗り縮へバ執次雄士はひさげ老いと後大に令状ていざ此方へ来り給へと座敷まで成ゆくなり借彼処と指していざ主人の居まはる積進むべしといへバ小四郎ハ危く縮めつゝ早く佩刀を持さうてらのての障子の傍におきさなるく席の外に居てうつむきて袴を窺ふ時政ハ上坐に褥を敷てありけるが夫と見るより立り下りて外さんとするとき

挙て相公所労と兼ける。その侍従く坐し奥外しあれバ在下が心中還て心易し。しかしと咲て時政ハ莞示と笑て他ならぬ和殿と吾ハ親しき中こそ許さめのことそのま坐せバ小四郎ハ猶惶き致ひ寒暖を伸べ所労を問ひ然して後ハ人もあらへ憶談ても原思ひつる石戸の荘の一件も。這回吉見殿に傷あらん吾々公子が情動の画策とすりしも時ぞなれ今更に詮方なけれど倚向に相公の作にも頓ちハ是を計らひ給へ。但吾々ハ執権の職に在る程ハ計らひてん心易く覚ゆべしといへと貌に宣ふ言葉も半ハ傷つりし心地せられまて歓びしに若ひのよらぬ這回の結構ハ教書を添て腰さへも浮さぬぞりて発るさへ。然れども執権相公定めて深き賢慮も在さん。静かに坐して侍に如ど。一回ハ暴ざらん胸を鎮めて申ひしかど渾家子の歎きもありつるに忍びぞ。然らバ孫舍にも來て相公に拜謁し内心の底を窺がハん。と侍こそ遠さく來りて見へしの後とかく計らひて給りやらんその條を若しらずや

承りて老来の楽みなきまゝも欲するなり。然すまゝさへ寸功も似らぬ死して
賞のことを貪るは烏滸の白徒と相公の怒りに觸るべよう人なれ死にゆかへし営も
望えなげきこれなく奥殿の教に然は全く由縁のなきにもあらず。唯是をもて怨
みまでなり。相公宜なく愛憐ありて荘園は石戸に限らず。ましや秩父の山中なり
とも。元より宜べ弘義が老後の眉目と称ずなりし惨然として淡けもへ。時政
薨と継役りし和殿が述懐理あり。故に父の地なればとて喚挙なさんとこと。
既に再三に及びしかど。故右幕府のなんじあり。荘園のことにつひては。徳士一統に評
議ありて各異存なうきにもあらねば。揚つてぬ障ありて。吾由まで自由なし難く。股義なく
吉見に元より宜べあるれども。吉見の冠者は彼張者の義秀と骨肉のゆくに妃
なくて。後ろへに家に禍ひせんの渠にあり。因て近国陸奥にて。比怯の挙動あ
はと責め。放ち肉人のゆくなり。方寸の地とも共に下ど云ひ出しが尼御台甚だ恐の法

士なる渠と見て。既にかく定めてまゝ舛と妨ぐべきことなきにもなくて。まづ其心に任すか。
あれ渠が性に不祥あらば。忽地に変改せんと。舛は吾方寸の裡にあり。と声ひ低
めていひけるに小四郎弘義肚裡に大く歎て執権が心を推し。膝で進め四辺を見て。
此度の彼人縁とより父の寛に陥らば。当家の禍と恨めるなり。実に相公の先
見は毫髪の差ひあらず。多くは領と充のは乱の基なるべけれど。渠等が分
際にて任ぜ朝夷義秀が一家を埒して荷擔すとも何条のことあらん。さ備まさ怪
しと思ふなる。ともかくは遠は注進するまゝず。下相公がおん為ならば犬馬の労をもいとわも。
在下さて学ず。心易く思さるよと。追従する気ろち茂り。時政片頬に笑みつゝ
今こそ和殿が好みを今ぞ知るず。吾は義時をも生にとてして厭わり。
で恨むらくは和殿の心中。実に彼家に傍らるや否のこと知るべからず。心を
傍るとあり。猿楽と告べきことあれど。駟も舌に及ばざる聖の金言あり。しかは慢に

舌と動う雅。と涼ず心と励ませ小四郎いかも敢ず。つるも数年言葉べ。
入るゝ外様を。犯さく物と宣ひ。のさくまゝわが在下が心ぬ何ぞと敬ひの八
日。聊理のひわまゝれど在下荀日西刀と帯び争うに之を食て人と騙作ると
城たるべ。开ひ人ぬもこそ依るべけ之相公が少切とも。芳人ぬるゝと歎息して。
恨め気ある面特と時疎ゝるより声と低ゆ。大くの怨こそ彩いひいよく足
下ぶ心の蕃と固めこせん為のるべ赤心るい嫌ても新まるゝ世方へ。
膝と進め耳突出。同行ゆ久ゝと敬て小四郎い退出りかくてゆ青ぬ。
頻金と起ゆ。第二月ぬ足之郡石戸の波ぬ著るゝ笹媛い昨日の甲夜
男児ぬ産ぬと少急ぎ冠者ゆ不ぬ。在下い宮小四郎公義れ。と逆
回い雲ぬと領せゝと近ゝ入部あるべ。と御教書さ之ぬ日ぶ路次ゆて刀彩の
来除と近へる若るまで頻金ゆ狂強ぬ。病者のゆひて今駱ぬ逆

とあり。頓ゝ手り呉よとあるぬ辞ゝがくて彼処ぬ寄う。病ひと湯ーぬ慮の
外為り方ぬ之ゝ沙と。然いて迷ぬ帰らまゝ忘るゝぬも帰宅遅引国て
不束ゆる紛董次秋弘とりて名代と。人祁と逆ゝ命じる。失敬の段い看恕と
清のこ依滞ゆく荘園へ移らせゆ人て大慶至極殊ぬ唯今義ま。奥方ぬ産
安くして若君生まりゆ。返この儀ぬ歎び祝者何ぬこまぬ迎ん。と恭ゝく述け
まゝ吉見の冠者ゆ移と渡ゝ。ゆひゝ者ぬ歩ぬ。過日入祁ゆる処
石戸左衛門の舊彼瀬敗ぬよりて侍ゝ。その修理と加るぬど。足下ぶ宅ぬ
在べ。と荘官共のまゝたぬより則ゝまゝ。董次ぬ及び斧木ぶ徳実
河ぬ稱いをさまゝず弭ぬ渾家ゆる笹媛い初産ゆて侍者ゝるゆ。ゝゝ雄士
ゆて系ぬつた綜の見へゆのこゆるゝと且蓑斧木ぶ老実ぬ痛ゝ扶けて志ゝ。
男児と之寿ーつる都て是為ハ足下の賜ゆの辱ーと述けまゝ。小四郎い猶

義ゲ
家ヲ
嫁翠
を産む
よし邦
ひろよし

をの木
かさこひめ
大ゝ丸

種々と肴ふ花と飾らせて追従すれバ渾てから形且従者等ふ分付て珍味佳殽
を調理させ宿主の者ふ持出て是ハ鹿林なりけるなり。都て這田の佳儀と執す。
在下が寸志なり快く一献を酌せぬハ大慶なるべし。その邊ハ海ふ遠く魚肉ハ殊
さら拂底なれバ千寿川の鯉とのミ所の者ハ賞翫すなり梅田の牛蒡岩槻葱
ハ名物なれど程近からバ折ふふれてハ芝浦雑喉の來ることもあれど是等ハ旨人の
便路ふよるにハ借くしてハ定めがたく。又冬春ハ浅草海苔この浜ふも澤山なれ
のミ他ふハ品類なし。と僅ふ誇るのミなれバ然ハまし今よりこの所ふ居住と卜ならバ
すべ自人贅篤く遠方の客人も後来べく然るに人傑の居る処ハ一年ならで邑を做し
三年にして都となすとまうし侍へれバ人が就てぞ繁華の地となるらん君ハ龍食殿の
連枝として大荘の五十箇所も百箇所も持なる人也殊ふそれ在るの不祥ハ
是非もなし今より後ハ稍々ふ繁栄すなるべし誘ふ挂て心のかゝしく候まよ

でふ祝てまバ吉見の宿者ハ類を赧らし小四郎ぬしよ大ふ迷らう。在下斗る迷
ふ徒あるらん。近曾諫言ふ通しまそ欽だざる面持ふ斧木ハ傍より口と副へ宿
者よさのミ歎くあひそ妾が良人ふ義ハ世ふひ名達なる者ゆゑ心ふ畏けまで
さくなく已が善ときそも限りもなく賞咬。却て人ふ悪きまをふどいふことハ
ゑれー。さまそて一点だらも佞奸なく在の侍なる性あて侍り今より后ハ枘ふ
まう金刀称の指揮をうけて之を斗従がふをるな所か縮らん白徒と思ふされ
イた処の為ぬり。妾もさ悉る鳥辭人ならず。然あれせよとうち笑へバ宿主も
ぬ大ひて心裡ふ吾称しの艱難辛若と做しうる処ぬハありながら思慮足らずそ
小四郎が詞を許ふ皆はわうるひし純なりしるひてそり。かくて酒宴の甜しまり。
主客れとも酩酊まそ四方八方の物語且ハ各々の上の浮沈などいひ出て其
興まで尽ぬなり。小四郎宿者ふうち對ひ何ふもまうしめぐて君ハ蒲殿のゆン

曹司にて産まれ玉ひその時ハ三夜五夜七夜の儀式形の如くに為し玉ひ実に源
家の嫡流といはんほどなれバ景勢ハ在下その折在鎌倉にて勝なりしが世の
中を憚りて斗り義もなくと思ひけるが夫より絆の出来て後ハ猶さまざまに語
ひて遥去るをみるに鈴煩のせし時なりてその荘の地頭となりたる人ど昨日今日まで居
続さんハまだ全く個ハぞ立ちて若君の産まれ玉ひしを。あなうれしと寂しきにも親しみまうす
すへ吾们のみ此若君も成長ありての後ハ一方の大将となりて名を成すべき。さるほどに然れ共の
儀となりて後来の繁栄を祝しまゐらせ然るべしとて五かる遥郎ぞ残る人々
しけれバ式めハ五懸流鏑馬などの人々を因みあらず。さまでハ近日狩倉を催
さまで若君の御誕生の祝ひを寿ぐべし。列卒ハ荘園の農民们を狩催すその
序に今度地頭吉見刀称入部と祝し若君の誕生を寿ぐ為狩倉を催さんと
触るとなハ農民们もその吉瑞と称ぐべしとのすゝめ何ごともありけれバ時君の要時

沉吟する折ハ一段のおもひて足下が好みさせてこそ今入部その間もあらバ狩
倉と催さんなる人々思何ぞ程からん此節あらバ何ぞりの寿ぎもあらすべきことなりて
董次が傍より武士ハ狩倉漁猟と全く庇の保たせと世ず。弓馬と試みる水練ハ習ふ
の為にて武用と唱へてさまでハ入部の折々にことと倣しぬへて武威を諸民に示すに宜
べ。在下若年なりともへども父の物語に兼ね聞ば家系全く昇進にあらず然くも
一世の程にて家名を揚げんと存ずるにあらねて折々狩猟をなすとへども数ならねバ
威勢あらず。僅四五個の列卒と傭ひ山谿と索ひる故鹿一頭とも獲ることハ限り
もあらぬ獲物にてその心を慰めんハ然まども馬に示して悪所巌石と跳るそれ怒
らく人に負じとおもひさ。然バこれハ一郷の人をもて列卒とす。山野隈なく狩んとぞ
よれ興ありてかつ刀称深く思慮しあれバ不日に催しまん事と切に勧めて止ざりけれバ江
三二廣光もどふ商議するさバ遥おもひと渠ハ生憎越へ出でそて販るゆへ程遠し

如何ぞやと問答さへ果敢なく思ひるまで成て董次は頻りに三郎を勧めまた
小四郎もと主君の小事にさへ沉吟に及ぶべきとのみ思ひ入て猶ほ躊躇するべく人々
見び義邦元来暾湯の気象の烈しくまず木のもあれ竹のもあれ人の羽と
濡れぬ論はぬ性まありけるとぞ然りとて是に伏ひぬ董次秋弘大に歎じ父弘義の案
書を得て一郷へ觸れ廻り且明日とも定めて弓矢を始めその用具それ〳〵に消
る狩衣の今さ〳〵葉あくべきとてあ〳〵ねび摽呂郎に物とも語らひて幅
および狩衣裳事足らぬ斧木に憑て近郷に人を弛てその准備頻りに
に芒匡嬢は座所にありてとのみを出没す武夜傷に人をたて狩者に對ふ
低ろこの旧人のいとときけばとの座まつ和子の為に狩会として寿ぐ〳〵
談〳〵れとも脱に刀祇に狩衣裳と怒る人ば偽るに思ふに思ふに心ぞ
今更に繰物ならきとまで伝まとも成に子の児と胎孕しに陸奥の縁

に罪り刀称へ擒に修羅五郎経任が牢獄に在り妾は渠が側室に成ん尚
辞むとの〳〵獄に在る吉足の狩者と戮さんと挑むと再三再四妾熟思ふに
操と彼りて良人と助び孝貞の乃いに成ぬ〳〵と苟も妾が父九郎判官義経
と人に成り是〳〵将の嬢が強盗の側室とあるこの辱は雪ぐべ
〳〵なりとて是に従はぬ忽地良人の命と取られ〳〵に世に生と夜の眼も会に歎き
死んとかるに仏助佛力の〳〵と一心不乱にその昔父判官の会〳〵に山城歎る
の毘沙門天近くに安に應澤明神に月来祈念する圓通寺の観音菩薩埋伏
拝〳〵て冥助〳〵にその青漸く緩りて〳〵の柵の西南に塹港の名に成れ日毎
十領の衣と流へと紙頻に芳恨と且く安と心地に夫〳〵月の明に成ぬ盟
と仇と舟に換へかの塹港と潜り出て進退脱に若まり〳〵て猶に死ぬ〳〵
彼方の岸に渡む武士釣〳〵出て盥と倚せ〳〵の鬼も孤に〳〵教まる別人〳〵ぬ

義秀ぬくかくて賊徒を屠り竭力称日全きことあり人けり。主下妾死すみらべ。その孩児も俱に死て。伶方の土ともるべきと。圓通大士の功力不用して不測ふも助るつ月来少しの障るく。人並ふ奉蔵せ。い偏ふ仏祢の加護あやらんことどもの性ふ芳り。多人と恤と生類と救ひ。況て報恩とるすべきと然るにのこ寿だふ。狩会とて多くの獣の今とともんと俗一あ人ふ君ゞ日来ふ仏会ともつ。ん。その議ふ曲てどう人生ともの人ともそ縛めらる。理ふまゞ義邦日ふ同差とるもつ。俯て展ゆひろり

朝夷巡島記全傳第八編巻之一終

早稲田大学図書館
011888007514